

転換期の思想と文学 (二)

——中世文学考察への序章——

原 田 芳 起

一 兼好と増賀

法師ばかりうらやましからぬものはあらじ。人には木の端のやうに思はるよと清少納言が書けるも、げにさることぞかし。いきほひ猛にののしりたるにつけて、いみじとは見えず。増賀ひじりのいひけむやうに、名聞ぐるしく、仏の御教へにたがふらむとぞおほゆる。ひたぶるの世捨人は、なかなかあらまほしきかたもありなむ。(第一段)

『徒然草』第一段のこの一文は、読者の意表を衝いて、かなり強烈に鮮明な印象を与える。法師の身で法師の生き方を批判して、何のけれん味も感じさせない。兼好らしくて面白し、軽くさらりと言ひ流したかに思われる。一見いぶかしく思われそうな文句も、不

自然とも思わず、読み流せる。兼好の文体にそういう魅力があるのであろう。一種の逆説的な、ことばの魔術とでもいおうか、思想の矛盾があっても、敢えて矛盾と感じさせず、兼好の言う所に抵抗なくはいりこめるような、好感に似た気持を抱かせる。増賀上人の思想とその奇行に真向から共鳴同調しているのとも違う。増賀が強調しているように、ひたぶるの世捨人になれとどなり立てているのもないのであるが、その人から、その思想という点になると、増賀と兼好とは、決して似通っていたとは言えない。むしろ甚だしく異質的であったとさえ思われる。

兼好が増賀の言行に対して好意的に理解しているのは、増賀が平安期の仏教界を強く支配しつつあった形式主義に対して激しく否定している点に共鳴しているに過ぎないと思われる。兼好が当時の仏教界に対して改革の一石を投じようとしたのではなかった。彼の立

言ひ流したかに思われる。一見いぶかしく思われそうな文句も、不

場は傍觀者的であつたし、従つて意地悪な皮肉なものであつた。決して増賀の歩いた改革者の道を行こうとしたものではなかつた。

法師である兼好が、「法師ばかり羨ましからぬものはあらじ」と言つてのけたことは、いささか奇妙にも感じられるが、そこには自分が法師であることにも縛られない絶対自由を保持しようとしていたのであるうかと、私にはそう理解される。そこには増賀ひじりが眞実に僧侶であらうとして、そのためには、なりもふりも顧みず、敢えて醜態を演ずることによつて名聞を欲する世俗的欲望を断とうとしたひたぶるさとは相容れないものがあつたと思われる。

この第一段に、「人には木の端などのやうに思はるるよ」とあるのは、勿論、『枕草子』の「思はむ子を法師になしたらむこそ心ぐるしけれ」の章段に対して賛意を示したものであるが、法師として兼好の立場を考えるならば、これも矛盾といへばすこぶる矛盾である。清少納言の「ただ木の端などのやうに」と言い放つた警句の小気味よさを軽く褒めた兼好の気持はよくわかるが、清少納言の唯美主義的な心情の中には、道心のかけらもないのであるから、一方で増賀を引いてひじりの道心を称え、その同じ章段の中で清少納言の道心否定に近い言辞を並べて大胆な共鳴を示したのだからすくなくとも論理的ではない。尤も、清少納言と兼好とは、美観という一点では極めて近いところがあるし、増賀と兼好との間にも、外面的な威儀に流れて眞実の道心を見失つた仏教界の世俗性を否定しようとする一点では共通したものを認め得よう。

ただし、増賀は道心に徹しようとするひたぶるさから発した言行

教界に対して改革の一石を投じようとしたのではなかつた。彼の立

であつたのであるに對し、兼好の發言は必ずしも道心からするものではなかつた。すくなくとも増賀のよくなひたぶるさに共鳴したものではなく、むしろ自然と眞実さを欲する願望から形骸だけになり了らうとしている威儀仏教の形式主義に嫌悪を感じていたものと見るべきものであらう。その点ではむしろ清少納言の唯美主義的心情と通ずる所の方が大きい。清少納言は自由と自然を欲する心情から僧侶の世界に於ける禁欲生活に同調し得なかつたのであつた。特に若い男性が女性から強いて遠ざかり、「精進物のいとあしきをうちくひ」というような戒律の厳しい生活にみずからを投じているのを見聞して、不自然だと思つと同時に憐憫と嫌悪を感ぜざるを得なかつたのであらう。「若きは物もゆかしらむ、女などのある所をもなどうか忌みたるやうにさしのぞかずあらむ、それをやすからずいふ」といふような法師の世界の禁欲的戒律は彼女からすればおぞましいものであつたらうし、到底ついて行けなかつたにちがいない。彼女の唯美主義的情念からすれば、増賀が激しく否定した威儀仏教の莊嚴美に對してならば、彼女はむしろ恍惚たる感動を惜しまなかつたであらうことは、彼女の文章のところどころに指摘できるのである。

いずれの角度から考えても、増賀と清少納言との精神に共通点を認めることはできない。兼好が、一方で清少納言のことを引いて法師一般の禁欲生活を人情の自然にもとるものとして非難し、他方で増賀ひじりのいふやうなひたぶるな世捨人に徹すべきだと論じているのは、みずからを法師の位置に置いての立言としてはいささか

奇異な感じがする。しかしながら、これも『徒然草』が彼の思考のおもむくにまかせた随想の書であり、論理的な思惟を追う哲学の書ではないことを示すものであろう。兼好の思惟の中の「ひたぶるの世捨人」は、「木の端のやうに思はるる」類の、人間味のない無趣味な禁欲主義の存在ではあり得なかつたであらう。必ずしも増賀ひじりの道を行こうとするものではなかつたであらう。と同時に「いきほひ猛にののしりたる」形だけの高僧を形の上で尊敬する気にはなれない。名聞ぐるしい威儀仏教の姿をしりぞける増賀ひじりの精神に共感するものがあつたことも真実である。清少納言的美感と増賀的求道心との中間で、自由で奔放に思惟する兼好的立場は、いささかも矛盾するところはなかつたわけである。

ところで、増賀という求道僧の精神的実態は、今日のわれわれが手にし得る資料からだけでは容易に捕捉しがたいものがある。彼の伝記資料として手近に見ることのできるものには、『本朝法華験記』巻の下、「多武峰上人語」、「統本朝往生伝」の「増賀伝」、「今昔物語集」巻十二「多武峰増賀聖人伝」、同書巻十九「三条太皇太后宮出家語」、「宇治拾遺物語」第十二第七話「増賀上人参三条宮振舞事」、「撰集抄」第一「増賀上人の事」、「発心集」第一「多武峰僧賀上人遁世往生の事」等であるが、大筋はどれも異なるところがないが、彼の言動を記す部分に於いては、一致点はむしろ少ないといへば、ばらばらという印象を受ける。参議橘恒平の子、延喜十七年に生まれ、十歳で叡山に登り、慈恵僧正(良源)に師事して法華の教義を学び修業を積んだ沙門であること、ひたすらに出離を願ひ、

現世を虚仮のものと観じ、頗る奇行が多く、世人を驚かせたということ、多武峰に住して遁世隱居して生を終つたことなどは、どの伝記でも一致して疑うべきところはないが、彼の奇行狂態の具体的な話になると、一致しないふしおしがむしろ多い。後世になつて伝説化され、いわゆる話に尾鱗がついたと見なさざるを得ない。兼好の思ひえがいた増賀の人間像はどうであつたらうかということも一応考えておく必要がある。

彼増賀の思想が、名利を厭ひ離れるという一点に集約されるものであつたことは、上記いずれの伝記資料でも一致して明らかである。その原点を示す『本朝法華験記』あたりにはその言行に関する誇張や伝説化は見られないように思われる。その要を摘むと、

……年及十歳、登比叡山、作天台座主慈恵大僧正弟子畢矣。叮嚀誦誦法華大乘、殷勤學習頭密、通達止観、解了二乗。(本朝法華験記)

学問僧としての増賀はかくの如き人物であつた。若き日の彼の修学修行の姿はまさにこれであつた。かくの如く彼が頭密の奥儀を学び尽くし止観に通達するにしたがつて、当世のきらびやかな威儀と莊嚴とに粉飾された仏教界の現状に対する懷疑を生じ、解脱と出離を求めると至つたのであろう。

厭出假利生、背名聞利養、遁世隱居、為其志耳。(同上)

彼自らを含めて当世の仏教界の革新を欲して一石を投じようとする姿勢を示しているものと解してよからう。晩年の彼自身の記すところを引いたと思われる詞章に次のようなものがある。

教義を学び修業を積んだ沙門であること、ひたすらに出離を願ひ、

愚老増賀、年来所願、早去此界、往_レ生西方、其事在_レ今明、尤所喜申。(同上)

出離往生の素懐を記したものである。その往生のさまは、坐_二於_一繩床、誦_二法華經、手結_二金剛界合掌印。年八十余矣。(同上)と記されている。誇張した表現は認められない。すこぶる奇行に富んだ人であったことは否めないが、その奇行を記しても、後代の文献に記すような細部の叙述には及んでいない。

冷泉先皇、請_二為_一護持僧、口唱_二狂言、身作_二狂事。(同上)とか、

国母女院、敬請_二為_一師、於_二女房中、發_二禁忌_一麁言。(同上)などとはあるが、実際にどんなことを言ったりしたりしたのか、描写を欠いている。勿論世間にはかなり増賀の奇行は語りはやされていたにちがいないが、それが『今昔物語』や『宇治拾遺物語』等に語りつがれたところと全く同じであったかどうかには疑いがある。

『続本朝往生伝』は大江山房の撰述といわれているから、信頼度はかなり高からうとは思ふが、増賀の奇行の具体的な記述のあたりには、多少の誇張を含んだ伝承を用いるところもあつたのではないかと思われる。増賀の奇行を記すことが、『法華験記』よりもはるかに詳しい。

……嘗有_二后宮授戒之請、參入之後、於_二御所、示_二臭風。又曰、誰人以_二増賀_一為_二糲毒之輩、啓_二達后闈_一乎。上下驚嘆。

「臭風ヲ示ス」の具体的意味は知りたいが、『今昔物語集』第十九卷第十八話に伝えるような狂態を後の宮の御所で女人達の前で演

ころを引いたと思われる詞章に次のようなものがある。

じたという伝説を踏まえた表現であるうと思われる。「糲毒」云云も同様難解の表現だが、『今昔』に伝える「乱リ穢キ物」(見苦しい物)の意で、男根を意味する。)云云と関係がありそうである。後の宮は円融院の皇后、東三条院詮子兼家の第二女、円融院崩御の後三十二歳で落飾されたというから、事件は正暦二年(九九一)におこつたと見てよいが、匡房の『続本朝往生伝』撰述までには百年を越える隔たりがあるはずである。事が宮廷内で生じたものであり、何かと世を驚かす高僧増賀の奇行とあれば、この逸話が伝説として歩き始めるのは当然で、原事実から多少とも次第に遠ざかり始めることも想像される。「御所ニ於イテ臭風ヲ示シ」では具体的にはわかりにくいが、『験記』の「女房ノ中に於イテ禁忌ノ麁言ヲ發シ」に比較すると、やや具体的事実に近いのではないか。『今昔物語集』『宇治拾遺物語』が語る具体的な話にかなり近い伝承を踏まえているのではなからうか。

「……増賀ヲシモ召テカク令_レ扱メ給フハ何ナル事ゾ。更ニ不心得侍_レヌ。若シ乱リ穢キ物ノ大ナル事ヲ聞シ食シタルニヤ。現ニ人ヨリモ大キニ侍シカドモ、今ハ乱々ト罷成ニタル物ヲ。若キトキハケシウハ侍ラザリシ物ヲ、糸口惜_レト云フ音極テ高シ。(今昔物語集卷第十九)

聖人罷出ナムトテ、大夫ノ前ニ袖打合テ居テ云ク、年罷リ老テ風重クテ、今ハ只利病ヲノミ仕レバ、參ルニ不能ス候ヒツレド、態ト思シ食ス様有テ召シ候ヘバ、相構テ參リ候ヒツレド、難_レ堪ク候ヘバ、忽ギ罷リ出候フ也トテ出ツルニ、西ノ對ノ南

ノ放出ノ簀子ニ築居テ、尻ヲ搔上テ棟ノ水ヲ出スガ如ク、啼
ク散ス。其ノ音極テ穢シ。御前マデ聞ユ。若キ殿上人侍ナド此
レヲ見、咲ヒ嗤ル事无ニ限リ。聖人出ヌレバ、長ナル僧俗
ハ、カ、ル物狂ヲ召タル事ゾ、極テ誇リ申ケレドモ、甲斐无ク
テ止ニケリ。(同上)

常識に束縛されない言動ということは、増賀としてさもありなん
と思われるが、それにしても疑わしいふしもある。召しを受けた時
に「増賀コソハニハ成シ奉ラメ」と、進んで受諾していたとい
うのに、この暴言狂態は不自然に過ぎる。辞退した者がかくの如き暴
言を吐いたというならばわかるが、進んで受諾した者がかかる暴言
を吐き狂態を演じたというのは何たる事か。『今昔』の説話の如く
ならば、世人が難じたように物狂いである。往生伝には、わざと悪
行をなし悪評を流す類の風狂の修業僧が少なくない。それらは、こ
とさらに世間から遠ざかろうとしたもので、理解しがたくはない。
増賀はなぜ進んで后の宮の請待を受け入れた後にこのような狂態を
尽くしたのか。その狂態たるや、わざとらしさが目に立つ。所行と
信念とが一致せず、ばらばらになっているのは、『今昔』の伝える
説話が真实性を欠き、誇張・不自然のあらわなものであると思わせ
る。伝承の中で生じた説話特有の歪曲が、増賀の人格の統一を損っ
ていると見なければなるまい。『宇治拾遺物語』の語る所も、右の
話と大同小異である。万治板本巻十二の第七話、「増賀上人参三条
宮「振舞事」によると、

ひとへに名利をいとひてすこぶる物ぐるはしくなん、わざとふ

るまひ給ひける。

と、わざとの振舞いと取られていた。進んで召しに応じたこと、そ
の言葉も『今昔』と全く同じであるから、『今昔』に依ったと思わ
れるが、描写はかなり細かになっている。結びに

かやうに事にふれて物狂ひにわざとふるまひけれど、それにつ
けても貴きおぼえいよいよまさりけり。

と記している。簀子にしゃがんで尻かきあげてひりちらしたのも、
故意に振舞ったのだと解したかのようなのである。これをしも「ひとへ
に名利をいとひ」たる故意の演出と取るのは、それはむしろこの演
出のためのあながちな説話化ではなかったかと疑ってもみるべきで
はないか。『験記』にはただ「口ニ狂言ヲ唱へ、身ニ狂事ヲナス」
とある程度の短い抽象的叙述である。「国母女院 敬請シテ師トナ
ス」とあるから、三条の太后の剃髪の導師となって奇怪な振舞いを
したのが事実であることは確かだが、口頭で伝えられる逸話とい
うものは、奇行の風聞などでは特に誇張変容は避けられない。
兼好の描く増賀上人像はいかなるものであったか。必ずや説話集
の類によらざるを得なかったであろう。

「増賀ひじりの言ひけむやうに名聞ぐるしく云云」とある。『徒然草』の表現は、増賀が言った言葉というものを意識し
ているはずである。増賀が師の慈恵僧正の祝ひ申しの賀の日の行列
に前駆の人員に加わり、干鯉を剣とし、牝牛に乗って練り歩いたと
いう話は、『続本朝往生伝』に出ている。狂態をわざと衆人の前に
見せるのが目的であったと解されるが、これも事実のままかと疑い

ひとへに名利をいとひてすこぶる物ぐるはしくなん、わざとふ

見せるのが目的であったと解されるが、これも事実のままかと疑い

たくなる。この話は『今昔』には見えない。『今昔』巻十二には、彼の生い立ちの奇瑞のさまざまの話を記して、凡俗の人と異なることを強調し、「現世ノ名聞利養ヲ永ク棄テ偏ニ後世菩提ノ事ヲノミ界ケル」とある。彼の行状の中心となるものが、名聞否定にある事は明白だが、干鯉の太刀を佩き、牡牛の見苦しきに跨って、行列に加わって練り歩いたという記事はない。実は別の人の話としての類似の伝承が『今昔』にはあるのである。それは、聖宝僧正の若き日の逸話として、賀茂の祭の日に、裸体で干鯉の太刀を佩き瘦せたる牛に跨って一条大路を練り歩いたというのである。聖宝は寛平二年貞観寺の座主となり、延喜二年に僧正となったというから、百年近くも古い。その聖宝が若年の日に、東大寺の上座法師と争ってその睹事を果たすために勇をふるってやってのけたというから、こちらは不自然とも思われない。増賀がそのまねをしたというのでは真実性が欠ける。

思うに、『続本朝往生伝』に、

僧正申慶賀之日、入於前駟、増賀以干鯉為劍、以牡牛為乘、供奉之人雖却去、猶以相從。自曰、誰人除我勤仕權房御車前。

とあるのは、必ずや聖宝僧正若き日の逸話が増賀伝説の中に、いつの間にか付会せられるに至ったものであろう。伝説化の流動はかようなものであったと思われる。『今昔』巻二十八第二話の頼光の郎等(四天王)たちが女房車に乗って柴野まで祭見物に出かけた失敗談が、『平家物語』巻八に見える木曾義仲が牛車に乗って院参してさんざんの目にあつたという話のもとの話であつたかと思われる。

増賀伝の場合も、『続本朝往生伝』のあたりになると、多分にこのような流動性加わらざるを得なかつたであろう。

ここで考えようとするところは、兼好が増賀伝説のどのあたりから影響を受けたものかということである。さきにも少し触れたように、兼好の趣味性には、優雅なるものを愛して粗野なるものを嫌悪する傾向がはっきりしている。その点からいえば増賀ひじりの人となりの全容は、反優雅であり、粗野であつて、兼好の趣味とは合わないようである。ただ名聞ぐるしさを忌み、形だけの威儀莊嚴にすがるうとする当代の法師一般の風潮に対して否定しようとする方向で増賀と兼好との一致を見ることが出来る。名聞ぐるしさを否定する方向は、中世の世捨人的の心念の中核をなすものである。『大智度論』「名聞」ということは、勿論、仏典から来ている。『大智度論』を始めとして多くの經典に、「名聞利養」という熟語として見うけられる。『本朝法華験記』に、「名聞利養ニ背キ、遁世隱居スルト」云々と記されたあたりが、隠者的道心の中核となっている。

「名聞利養」という四字の語形は、わが国では、『法華験記』から『今昔物語集』に及ぶ文献に、仏教語彙として見られるものであるが、和文体の作品では「名聞」という二字の熟語として、意味もやや特殊化して、名聞を願う心情を表わすようになっていく。『大鏡』では、洛時の性情を叙して、

この大将は、父おとどよりも御心さまわづらはしく、くせぐせしきおほえまさりて、名聞になどぞおはせし。

とある。世評を気にする性質が強かつたことを表現しているので、

「名聞に」で形容動詞化していると見なすべきである。

『徒然草』の「増賀ひじりのいひけむやうに名聞ぐるしく」は「名聞くるしく」と清音に読んで、「主観的に名声や外聞が本人に取っても苦しくて」と解釈するむきもあるが、これは第三者から評して、「名声や外聞に執着するさまが見ぐるしくて」という意味を表現しているのではないか。

ところで、さきに問題として提起したように、兼好は何に依拠して「増賀の言ひけむやうに」と書いたのだろうか。『験記』にも、『往生伝』にも、『今昔』にも、『宇治拾遺物語』にも、増賀が「名聞ぐるし」とも「名聞」とも言ったことは伝えていない。兼好が依る所なしに「増賀ひじりの言ひけむ」と書くことは考えられない。

増賀の「増賀ひじりの言ひけむやうに」と書いた典拠は、長明の撰述と伝えられる『発心集』第一の五「多武峰僧あつた賀上人遁世往生の事」以外には考えられない。

……師の僧正悦び申し給ひける時、前駈の数に入つて、からぎけといふ物を太刀にはきて、骨のかぎりなる女牛のあさましげなるに乗つて、「やかたぐちつかまつらむ」とて、おもしろく折りまはしけり。見物のあやしみ驚かぬはなかりけり。かくて、「名聞こそくるしかりけれ。かたるのみぞたのしかり」とうたひて打ち離れにける。僧正も凡人ならねば、かの、「やかたぐちうため」とのたまふこゑの、僧正の耳には、「悲しき哉、我が師悪道に入りなむとす」と聞えければ、車の内にて「これも利生の為なり」となむ答へ給ひける。

恐らく説経師の間で、方便的には付会された話が根源となつたものであろう。増賀に付会された今様歌「名聞こそはくるしかりけれ、かたるのみぞたのしかり（ける）」について弁じておきたいが、「名聞」は仏教語彙の「名聞利養」の略であつて、名譽外聞と同義ではなく、

己が名声の広く世に聞えんことを願ひ、又、財宝の利を貪るをいふ。（仏教語彙）

という意味を内包する。「大鏡」に見える所の「御心さま……名聞に……おはせし」の「名聞に」は右の「名聞利養」から来ていると解して納得がゆく。「くるし」は主観的に「苦しい」というのでなく、第三者評言として「見ぐるしい」と感ずるのである。『源氏物語』の若紫の巻に、

人々、海竜王の后になるべきいつきむすめななり。心たかさくるしや。

という表現があるが、この「くるし」が、まさにこの客観的批評の語となつている例である。同じく「朝顔」の巻に、紫の上を評した光源氏の批評、

君こそは、さいへど紫のゆゑこよなからずものし給ふれど、すこしわづらはしきけ添ひて、かどかどしさのすすみ給へるやくるしからむ。

とあるのも、「くるし」の同じような用例である。こちらに苦しい思いをさせる意から反転して困った御性質だと言っているのがあ。熟語に「くらべぐるし」があるが、これも、親しみにくい、睦

も利生の為なり」となむ答へ給ひける。

る。熟語に「くらべぐるし」があるが、これも、親しみにくい、睦

びにくい意となつて、客観的批評の語となる。

次に、「かたるのみそたのしかり」について、「たのしかり」を「たのもしかりける」とする本文もあるが、「たのもし」は意改による異文ではなかるうか。「たのしかり」の方が本来の形ではないかと思う。「たのし」の語義には、「ゆたかだ」「富裕だ」の意があつた。中世語では「貧し」の対義語でもあつたのである。「かたる」は乞食、乞食の身の上こそ頼もしいものだといふのではないさか不調和ではないか。乞食の境地の方が心のゆたかさがある、という方が、却つて納得できるのではないか。

ともかく、増賀が「名聞こそはくるしかりけれ」ということをばを口にした話は、『発心集』が一番古く、それ以前には見うけられないうことは注意しておきたい。慈恵僧正の悦び申しの列に加わつた話は、平安末期には流布していたようだが、「名聞」云云という言葉は『発心集』になつて始めて文字化されている。その『発心集』に至つて、増賀の往生談がすこぶる詳細になり、撰述者の解説もとまかになつてゐる。「いかでか身をいたづらになさむ、ついでを待つ」と、明瞭に死を願う心を強調してゐるし、

この人のふるまひ、世の末には物狂ひともいひつべけれど、境界離れむための思ひはかりなれば、それにつけてもありがたきために言ひおきけり。人にまじはる習ひ、高きにしたがひ、下れるをあはれむにつけても、身は他人の物となり、心は恩愛のためには、是此の世の苦しみのみに非ず、出離の大いなる障りなり。境界を離れむより外には、いかにしてか乱れやす

き心を静めむ。

とあるあたり、『方丈記』と相似た表現もまじり、単なる説話集から随筆随想録の域に近づいてゐる。このあたりを吟味してみると、『発心集』の撰述者が鴨長明であることを信じてよいと思へて来る。この撰述者は熱情を傾けて増賀の志に対して共鳴してゐる。干鯉の太刀の話は後世に増賀伝に付会されたものであろうが、この『発心集』撰述者の現世の境界を離れることを志とした増賀のひたぶるな道心に共鳴したひたぶるさは、文面に溢れてゐる。『撰集抄』にもこの増賀の干鯉の太刀の逸話は見あたらない。思うにこの話は長明の時代には、かの聖宝僧正の逸話を紛れ込ませた形で、増賀伝の中で流布するに至つたと思われる。

兼好が「増賀ひじりの言ひけむやうに名聞ぐるしく」と書いたのは、世に流布した話からというよりも、長明の『発心集』に依つてそう書いたと見るべきであらう。

兼好はそう深く増賀の思想に傾倒したかにも見えない。極めて軽く、世の法師一般よりもひたぶるの世捨人の境界の方がすがすがしいと言つてのけたかと思われる。だから一方では清少納言の文章を引いて法師一般のかたくなしさを嘲笑したりもしたのであらう。

二 増賀と長明と兼好と「結びとして」

前節でも触れたように、増賀と兼好との間には、道を求める心、即ち道心という点以外では、かなり異質的なものがある。増賀には

狂気に近い激情的なものがあるが、兼好はすこぶる冷静な理論的な性格の人であったと思われる。狂うた行動は彼に取ってはむしろ嫌悪の対象となつたであらう。

増賀は、後世に付会された信じがたい逸話をさしおいても、冷泉帝の御前に参つてさへも、「口ニ狂言ヲ唱へ、身ニ狂事ヲ作ス」と言われた事は、具体的な事實は伝わらずとも、否定できない事である。兼好はそうした狂態を可とする気持にはなれなかつたにちがいない。ある程度の距離を置いてならば、強く非難することはなかつたにしても、兼好の趣味からしては、すくなくとも自分がそんな状態に置かれる事には堪えられなかつたであらう。「徒然草」八十五段に、

かりにも愚をまなぶべからず。狂人のまねとて大路を走らば即ち狂人なり。悪人のまねとて人を殺さば悪人なり。驢をまなぶは驢のたぐひ、舜をまなぶは舜の徒なり。偽りても賢をまなぶむを賢といふべし。

とあるのは、兼好の精神のありかたを示すものといえないだろう。増賀の場合、その狂言・狂事と伝えられた事の実態がいかなる物であつたか。いかなる目的、いかなる意図によつてなされた狂事・狂言であつたにせよ、兼好の思想からすれば、はるかな距離を置いてならば同情はなし得たであらうが、自身の位置では認同調することはおそらくあり得ないことであつたろうと思われる。『今昔物語集』巻十二「多武峰増賀聖人語三十三」が総括したごとく、増賀は「現世ノ名聞利養ヲ永ク棄テ、偏ニ後世菩提ノ事ヲノミ思」い願

つた人であつたというのが真実であらう。彼がこの厭離穢土欣求淨土の一念を堅持するに至つた契機については、後世の付会と思われれる伝説もいろいろある。母親が諫めて名聞を求める心を去るべきを教えたとか、伊勢の内宮に詣でて、名聞を去れという神託を受けたとか、後世の付会的伝説と見てよからう。彼はおそらく仏教の奥所を学ぶ中で、当時の仏教界が荘嚴華麗な威儀の外面に眩惑されて本来の教義が見失われていることを悟り、身を以つて警世のための捨石となるうとしたのであらうと思われる。

加えて、この名聞を離れて往生を願うということは、増賀だけに見られた特殊なことではなくて、仏教界の一角に一つの風潮をなして動きそめていたことも明らかである。『今昔物語集』には増賀の場合と類似の説話がいくつも収められている。横川の源信僧都に関する話もその代表的なものである。源信僧都は増賀とほぼ同世代の高僧、『往生要集』を撰している。一条天皇の代に召されて僧都にまで至つたが、やがて横川に籠居して、著述に専念している。『今昔』には、「道心深キガ故ニ、偏ニ名聞ヲ離シテ、官職ヲ辞シテ遂ニ横川ニ籠居、」一「静ニ法華經ヲ誦シ念仏ヲ唱ヘテ、偏ニ後世菩提ヲ祈」つたとある。これら多くの説話には、ほとんど共通して「名聞ヲ離レ」、「後世ノ菩提ヲ願フ」という類の辞句が見られる。巻十四「彦演僧正誦ニ金剛般若・施・靈驗・語」にも「現世ノ名利ヲ離レテ後世ノ菩提ヲ願フ者」という文句がある。増賀も源信も彦演もいわゆる持経者である。現世の名聞利養を離れて専ら念仏誦經に明け暮れる持経者には験力あらたかなものがあるという信仰が、仏教界の

は「現世ノ名聞利養ヲ永ク棄テ、偏ニ後世菩提ノ事ヲノミ思」い願

れる持経者には験力あらたかなものがあるという信仰が、仏教界の

一角に一陣の新風を捲き起したと見ることもできるであろう。それが次の時代に信仰の世界を掩い尽くすに至った新興仏教につながるものであったと考えることもできるであろう。

さて、この章の最初に課題とした所は、増賀から兼好へ、線を引いてみるという単純なことであった。兼好の文章の「増賀ひじりの言ひけむ」という字句の末にこだわってしまったわけであるが、法師の身として名聞がましいわざをすることを悪む点では、兼好も増賀たちの思想に共鳴しているのである。「ひたぶるの世捨人」こそ法師にあらまほしいことであるというのであった。ただ、兼好が「増賀ひじりの言ひけむ」と書いた点について注釈的にいえば、その原拠となったのは『発心集』であって、増賀が「名聞こそはくるしけれ」という今様歌をうたったということは、増賀伝についての付会的伝説であり、干鯉の太刀を佩いた云云の話も中世に及ぶ頃から説経師らによって付会されたものとすべきであろう。兼好は何となく『発心集』が伝えた増賀伝説を軽く受け入れて、「名聞こそはくるしけれ」を増賀が師の悦び申しの列に加わって、瘦せ牛の背の上で歌ったと信じて、自分の法師論に引き用いた。兼好は前にも触れたごとく、増賀のように狂熱的に厭離穢土欣求浄土の一念に燃えていたわけではなかったようである。彼は考える人であった。静かに思索する人であった。世事に対しても仏教界に対しても、多少傍観的ともいえる評論家であった。決して狂言を唱え狂態を衆人の前にさらすような、増賀ひじりに類する人物ではなかった。傍観者であるが故に必然的に皮肉屋であり、その点では長明とも異質な存

在であった。『発心集』が長明の撰著であると信じるならば、長明は前にも触れたように、増賀の思想に近く、現世の名聞利養を離れて往生の願いを果たしたいという一念にひたぶるな情熱を示している。

長明と兼好と、ともに宗教家ではないし、歌人であり、趣味人である点は共通している。長明は深刻な現実体験の果てに草庵に虚無の境地に住することで余生を楽しもうとした人であり、兼好もまた錯雜を極めた世相を觀じ來った結果として特異な人生哲学を持つに至ったのである。長明と兼好と中世という時代の生んだ人物として共通の傾向を示している。兩名ともに、古い王朝文化の壁を突き破るまでには至らず、觀念形態はあくまで堂上公卿的である。中世の新しい現実、特に庶民や武士社会に対しては、堂上歌人の枠の中にいた人々であったことは否めないことであろう。

(未完)